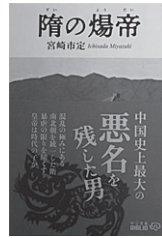


## 日本語・日本文学コース

## 高瀬奈津子

中国北朝隋唐史



## \*隋の煬帝

宮崎市定著

中公文庫 一九八七

隋王朝という王朝は、南北の統一、科挙制の設置、地方行政制度の改革、大運河による南北交通システムの確立など…中国史上画期的な業績を残している。また、隋王朝は二百数十年ぶりの統一王朝であることから、周辺ユーラシア大陸東部の諸国・諸民族に対しても強い影響を残している。とりわけ、日本の大和政権がはじめてまともに外交交渉を試みた相手も隋王朝であるから、日本の歴史に対してもかなりのインパクトを与えた王朝といえるだろう。

その隋王朝は五十年もたずに滅んでしまった。その原因を作ったとされるのが、本書の主人公、第二代皇帝の煬帝である。著者の宮崎市定氏は、本書を隋建国のいきさつから説き起

こし、さらに隋室楊氏の家庭環境を取り上げています。そのことで、当時の殺伐とした空気を感じ取ることができ、煬帝という人物がそうした時代を背負って登場したことが分かる仕組みになっています。

また、本書は隋代の歴史を知るだけでなく、その前後の時代にもふれているので、南北朝から隋、唐へと続く時代の流れを理解することができます。ゼミでは三国時代から唐代までの漢文史料を取り上げるので、本書を読んで、この時代の歴史の流れを頭に入れておいて欲しい。

その他の参考文献

- 宮崎市定著『科挙―中国の試験地獄―』中公文庫 中央公論新社
- 三田村泰助著『宦官―側近政治の構造―』中公文庫 中央公論新社
- 川勝義雄著『魏晋南北朝』講談社学術文庫一五九五 講談社 二〇〇三
- 李成市著『東アジア文化圏の形成』世界史リブレット7 山川出版社



## 漢字のはなし

阿辻哲次著

岩波ジュニア新書 二〇〇三

もはや日本語の一部となっている漢字。しかし、「漢字」という言葉が示すように、もともとは中国で生まれた文字である。その漢字を受け入れたのは日本だけでなく、朝鮮半島やヴェトナムなどもそうであり、その結果、漢字は国際共通文字としての役割を持つことになった。この地域では、話し言葉はそれぞれ違っても、漢字を使って交流した「漢字文化圏」が形成された。

では、その漢字はどのように成立したのか、どんな特徴があるのか、それを分かりやすくまとめたのが、この『漢字のはなし』である。著者の阿辻哲次氏は「文字学」という文字の成り立ちや性質を研究する専門家で、日本における漢字研究の第一人者である。阿辻氏は漢字の成り立ちに関する本を何冊も出しているが、本書が最も入門的な内容となっている。

本書で一番おもしろいのが、おそらく第三章「漢字の作り方」だろう。ここでは、「漢字」という文字のしくみ、解釈の方法、成り立ちが分かりやすくまとめられている。特に、漢字の成り立ちでは、具体的にいくつかの漢字を取り上げ、その漢字が作られた社会的背景まで説明している。また、「漢和辞典の使い方」についても言及されており、漢文学の授業を履修す

る人や、私のゼミを選択する人は、この部分を読んでおいて、漢和辞典とはどんな辞書なのかを、是非、知っておいてほしい。最後には、現代における漢字の問題を取り上げる。意外にも、コンピュータの登場によって、かえって漢字がよく使われるようになるとの予測を出している。本書は二〇〇三年に出版されたものだが、その予測は当たっていると思われる。

### その他の参考文献

- ・大島正二著『漢字と中国人―文化史をよみとく―』岩波新書 八二二 岩波書店 二〇〇三
- ・大島正二著『漢字伝来』岩波新書一〇三一 岩波書店 二〇〇六



\*日本の文化  
村井康彦著  
岩波ジュニア新書 二〇〇二

三人で写真撮ると、真ん中に写りたくないという人いませんか？ 真ん中にいると早く亡くなるという俗説があります。この発想の起源に、法隆寺の釈迦三尊像で有名な三尊像があります。中央に置かれるのが本尊で、両脇に脇侍です。つまり、本尊は「仏」さまなので、この世の人ではない、だから真ん中に写ると早く「仏」様になってしまうという発想が下敷きになっっているようです。

写真の立ち位置だけでなく、三尊像の影響は、室町時代八代將軍足利義政の東山文化が作り出した、書院造りの室礼の三幅を正式とする書画の鑑賞にも見られます。

院政期に歌聖として、六条家に柿本人麻呂の絵を飾り、左右に草木図を供えた人麻呂影供も、横綱が太刀持ち・露払いを伝える横綱土俵入りも、発想の起源は三尊像です。

また写真に話を戻すと、魂が抜かれるという俗信が生まれる背景には、自分の姿が撮られることへの恐怖があると思われるが、それとまったく同じ感覚を、院政期から生まれる源頼朝

像などで知られる「似せ絵」に対して、関白九条兼実が抱いています。

しかし今でもビデオでみると古典のイメージがよりはっきりするように、絵は、言葉よりも強く大衆の心を動かす力を持っています。それが、鎌倉期に『一編上人縁起絵巻』などの縁起絵巻が大量に生まれる背景になっています。絵と文学、絵と宗教の関係も日本文化の特徴として捉えることができます。

この本は、文学・政治・宗教・芸術というジャンルの壁を越えて、日本文化の特徴という視点で具体的な作品・史実を解説しています。文化学部の学生としてぜひ読んでいただきたい一冊です。

#### その他の参考文献

- ・角川書店編集『源氏物語』角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス
- ・岩波書店編集部編『日本古典のすすめ』岩波ジュニア新書 岩波書店
- ・武光誠著『天皇の日本史』平凡社新書



## あらすじで大づかみ 『源氏物語』と平安文学

川合童子著  
講談社a文庫 二〇〇八

古典といつてまっさきに思いうかべるのは、やはり『源氏物語』でしょう。十二単衣を身にまとい、琴を奏でて、和歌を詠む、そんな優雅な生活に憧れを持つ人も多いかもしれません。美しいものに取り囲まれていた女君の生活は、ひたすら男君の訪れを待つことしか許されませんでした。どれほど、恋しくても、女はただ待つだけ。

『源氏物語』には、数々の魅力的な女君が登場します。はかなさ、気高さ、優雅さ、やさしさ、可憐さ、妖艶さ、賢さを持った様々な階層・境遇・年齢の女君たちは、誰一人として魅力のない人はいません。愛らしく、憎らしく、哀しく、おかしく、それぞれ精一杯の人生を生きます。それらの花々の間をめぐるのが光です。なぜ、そんな多情な男が天下随一の男性とされるのか。それは、平安時代の現実が、けっして恋に満ちたものではなかったからです。

清少納言を抱える道隆と、紫式部、和泉式部を抱える道長、彼らの権力闘争は武力ではなく、どちらの娘のサロンが天皇の心をひきつけるかというものでした。平安時代は、天皇をはじめとした、高い位の一族と姻戚関係をつくるのが政治でした。

女君はそのための大切な政治上の道具。権力と結びつくためには、武力も学問も必要とされませんでした。いかに一族の中に入りこむか、いかに一族の娘を高い地位の一族に送り込むか。貴族の政治はそのことにあけられていました。旅先で、琴の音に足をとめてなどといった出逢いは、現実にはなかったのです。

女君が個として尊重されていなかった時代、光は、決して家柄では、恋をしません。光が求めるのは、教養と性格。美貌ですら、重要視しません。自分の個性、教養を発見し、評価してくれる。それも古今随一の貴公子に。これは、当時の女君の憧れでした。

『源氏物語』は、恋物語として今もアニメや漫画としてまで、知られています。しかし、当時の政治状況、社会体制を知ってこの物語を読むと、いままで見えなかった物語の奥がもつとよく見えてきます。

この本はその道案内をしてくれます。また、平安三才女、清少納言・紫式部・和泉式部の実態も垣間見せてくれます。一度、手にとり、通学時でも電車の中で平安時代にタイムスリップしてください。



## \*物語の体操 みるみる小説が書ける6つのレッスン

大塚英志著

朝日文庫 二〇〇三

著者の大塚英志は、『魍魎戦記MADARA』『多重人格探偵サイコ』『黒鷲死体宅配便』などの作品を手がけたマンガ原作者です。本書は、原作者としての実体験をもとに、「物語」を組み立てるための技術を徹底して実践的に、かつわかりやすく説明したものです。

副題にあるとおり、内容は6つの章に分かれています。これは、著者が実際にある専門学校で作家志願の学生を相手に行った講義ノートをもとにしたもので、各章には講義録風に「第〇講」とつけられています。具体的に挙げると、「第一講 本当は誰にでも小説は書けるということ」「第二講 とりあえず「盗作」してみよう」「第三講 方程式でプロットがみるみる作れる」「第四講 村上龍になりきって小説を書く」「第五講 「行きて帰りし物語」に身を委ね「主題」の訪れを待つ」「第六講 つげ義春をノベライズして、日本の近代文学史を追体験する」、です。

本書が従来の小説入門の類と一線を画すのは、物語作りを、

特別な能力を必要とせず、手順さえ踏めば誰にでもできる行為として位置づけていることです。実際、私のゼミではこの本をテキストとして物語のプロット（あらすじ）作りを行います。が、独りの例外もなく、完結したプロットを作ることができるようになります。

本書の面白さはそうした技術的な面ばかりではありません。身をもって物語を扱ううちに、物語というものがいったいどのような要素から成り立っているのか、物語が人間にとってどういう意味を持つのか、そもそもなぜ物語は生まれてくるのか、そういった問題へと、読者は自然に導かれることになるでしょう。そこからさらに考え続けるためのヒントもいろいろとちりばめられています。物語に興味のある人は必読の一冊です。

その他の参考文献

- ・大塚英志『キャラクター小説の作り方』角川文庫
- ・ウラジミール・プロップ『昔話の形態学』水声社
- ・ジェラルド・ジュネット『物語のディスコース』水声社
- ・折口信夫「小説戯曲文学における物語的要素」（『折口信夫全集』4）中央公論社



## 外国語としての日本語

佐々木瑞枝著

講談社現代新書 一九九四

日本語教育では日本語を母語としない人を対象として、世界の一言語としての日本語を教える。他の言語との比較における日本語の特徴を理解し、客観的体系的に説明できることが要求される。例えば、非母語話者は「難しかった」、「難しくない」と言うのに「きれいかった」や「きれいくない」が受け入れられないのは何故なのか疑問に思う。日本語母語話者には奇異に思える「私も寂がっています」にも日本語の感情形容詞の説明が必要になる。そして非母語話者が「ビール」を「ピル」と発音してしまうのはどのような理由によるものなのか。これらの疑問や問題を理解し解決するのは、日本語が当たり前の母語話者にとって容易なことではない。学習者のこのような疑問や問題と向き合い、理解する視点を養い、日本語を客観的に見つめ説明できる力の養成に役立つのが本書である。本書は著者の経験を基に、外国語としての日本語教育において特に重要なポイントが、以下のように七つの章に分けて書かれている。

- 第1章 日本語の音はここが違う——音声
- 第2章 動詞はどう教えるか——文法Ⅰ
- 第3章 動詞のさまざまな形——文法Ⅱ
- 第4章 形容詞と受身——文法Ⅲ
- 第5章 待遇表現の指導——文法Ⅳ
- 第6章 言葉覚える、文章を書く——語彙と作文
- 第7章 言葉にできないものを教える

普通にしていたら気が付かない奥底に潜んでいる日本語の特徴が、日常生活を通して経験する学習者の生の声を実例として平易な言葉で書かれていて、楽しく深く学ぶことができる。実際の授業で利用できる練習問題や教材の例と共に教授法も勿論紹介されている。外国語としての日本語教育に関心のある人は勿論、言葉としての日本語の特徴に関心のある人には是非推薦したい一冊である。

その他の参考文献

- ・上山あゆみ『はじめての人の言語学——ことばの世界』くろしお出版
- ・柴田武『日本語はおもしろい』岩波新書
- ・Jordan, Eleanor Hartz *Japanese: The Spoken Language*  
Yale University Press
- ・野田尚史著『はじめての人の日本語文法』くろしお出版

\*  
日本語の歴史

山口仲美著

岩波新書 二〇〇六

私たちが日常使用している日本語は常に変化している。最近の若者の言葉づかいについて「乱れてきた」と危惧する人たちがいるが、日本語は太古の昔から常に変化し続けているのである。若者の言葉づかいも乱れてきたのではなく、変化し続ける日本語の一面を呈しているだけである。

本書は変化し続ける日本語を、以下の如く歴史軸に沿って通観した書籍である。

- I 漢字にめぐりあう―奈良時代
- II 文章をこころみる―平安時代
- III うつりゆく古代語―鎌倉・室町時代
- IV 近代語のいぶき―江戸時代
- V 言文一致をもとめる―明治時代以後

日本語を学ぶ際には文法や仮名遣い、音韻や文体といった初学者にとって多少眉をしかめたくなるようなテーマを回避することはできないが、本書では難しい解説ではなく古典文学や古史料から多くの引用文を実例として掲載し、平易な表現でわか

りやすく説明している。また引用文には現代語訳を付し、古典が苦手な人にも内容が理解できる工夫が施されている。

巻末に掲載されている本書執筆のための「参考文献」リストは、そのまま日本語史を学ぶ学生の必読書リストでもある。是非、本書を読み終えた後に読んでもらいたい。

日本語の歴史に興味がある学生はもちろん、現代日本語や日本文学に興味がある学生にも是非推薦したい。新しい発見を必ず得ることができる一冊である。

## その他の参考文献

- ・小松英雄著『いろはうた』中公新書
- ・築島裕著『日本語の世界5 仮名』中央公論社
- ・築島裕著『歴史的仮名遣い その成立と特徴』中公新書
- ・笹原宏之著『日本の漢字』岩波新書



## 訓読みのはなし —漢字文化圏の中の日本語

笹原宏之著

光文社新書 二〇〇八

日本語を表記する際に用いる漢字は元来中国で生まれた文字で、日本人はその漢字を受け入れ、日本語を表記するようになりました。さらに漢字と和語（大和言葉）を結びつけることにより日本における訓読みが誕生したのです。訓読みはかつて漢字文化圏諸国で行われていましたが、現在、多彩な訓読みが一般的に用いられているのは日本だけでしょう。この多彩な訓読みは日本語表記を複雑なものにしていることは否めませんが、一方で表記の自由度を高めているのも事実です。本書はこの訓読みについて、具体例を数多く示しながら、わかりやすい解説を施しています。

本書には当初「月極駐車場」「ゲッキョク」と読んだことはありませんか？」と書かれた帯が付されていました。「月極」を「つきぎめ」と読むこの熟語は、現在の学校教育に登場しません。「極」について本書では次のように説明しています。「極」の訓読みは常用漢字表によると「きわめる」で「きめる」ではないが、日本では江戸時代から「きめる」という意味と訓が存在し、明治の国語辞書『言海』でも「きめる」の見出し表記には「極」しか掲げられておらず、「つきぎめ」の表記も明治初期から「月極」と表記されていた。しかし戦後の当用漢字

で「きめる」は「決」、「きわめる」は「極」と役割分担が明確化され、それ以降は「極」を「きめる」とは読まなくなった。つまり、「月極」を「つきぎめ」と読むのは明治時代の名残ということになります。余談ですが「極」の説明の最後に「北海道や四国辺りの地方で「月決め」という異表記を目にすることがある。」と書かれており、確かに札幌近辺では「月極」「月決め」「月決」「月決め」の表記を確認することができますが、この多彩さは全国でも珍しい現象です。

「極」以外にも様々な訓読みやその背景について説明が続きますが、最終章に「東アジアの訓読み」として中国における訓読み（漢字をそれ本来の漢語による字音とは別の漢語によって発音する）、朝鮮・韓国やベトナムにおける訓読みについての説明があり、漢字文化圏諸国における多彩な漢字受容の実態を確認することができます。





## 日本語の奇跡 ―(アイウエオ)と(いろは)の発明

山口謠司著

新潮新書 二〇〇七

現在の学校教育で最初に習う文字はひらがなです。ひらがなを学ぶことによって、日本語の文章を書けるようになります。

その後、カタカナを学び、さらに漢字を学習します。学校教育でひらがなやカタカナは「五十音図」を使って学びますが、これは一九四七年（昭和二十二年）以降のことで、それ以前ひらがなの学習に使われたのは「いろは」、カタカナは「五十音図」でした。それは文字を学ぶというより、日本語の発音が体系的に羅列された「五十音図（カタカナ）」で発音を学び、「いろは」にほへとちりぬるを（色は匂へど散りぬるを）…」と七五調形式の歌である「いろは（ひらがな）」によって日本人の情緒や繊細さを習得したと言えるでしょう。このようなひらがなやカタカナは漢字が形を変えて成立した文字ですが、では、いつ頃どのような環境で誕生したのでしょうか？

本書は、漢字が日本に伝来して以降、日本語表記のためにどのように用いられた変化したのか、また日本語の発音が変化する中で、文字として表記されたひらがなやカタカナは、その後の日本語の歴史（近代に至るまで）にどのような影響を与えたのか、などについてわかりやすく説明しています。単に歴史的な言語現象を述べるだけでなく、聖徳太子、空海、明覚、藤原

定家、本居宣長など、日本史を彩る人物たちの言葉に関する業績や、彼らの背景にあった政治体制、宗教、そして彼らがどのように中国文化を受け入れたのか、あるいは日本文化にどのように影響をもたらしたのかについても述べられており、大変興味をそそられる展開となっています。本書によって、日本語史上のさまざまな問題を理解することができるよう。

本書の「あとがき」にも書かれています。ひらがなと「いろは」は空海によって作られ、カタカナと「五十音図」は吉備真備によって作られたというのは伝説です。伝説ではない歴史には伝説以上に興味深い事実や背景が存在します。日本語の歴史も同様です。その歴史と向き合いながら、(アイウエオ)や(いろは)の役割を考えるのも面白いかもしれません。



## \*多言語主義とは何か

三浦信孝編

藤原書店 一九九七

近代以降、わたしたちは、ことばと人の関係をどのようにとらえるようになったのだろうか。また、その結果形成されたわたしたちの言語観とはどのようなものなのだろうか。たとえば、わたしたちがことばの数を数えたり、表したりするとき、「二カ国語放送」だとか「三ヶ国語話せる」と表現し、わたしたちのことばとは異なることばを指し示して「外国語」と言い表す。そこにどうして「国」ということばが現れるのだろうか。また、「日本人」の「母国語」は「日本語」であると思っていることが多い。しかし、「日本語」を「母国語」として考えている人は、「日本人」だけののだろうか？ どうして「日本人」は「日本語」を話す人、という風に考えてしまうのだろうか？「日本語」を話すことができない「日本人」は存在するのだろうか？ このように考えると、わたしたちの意識の奥深くには、「ひとつの言語はひとつの国家に対応する」という考え方が埋め込まれていることがわかる。

本書は、そういった近代が生み出した幻想のひとつ、一国家

一言語、一民族一言語という神話を異なる専門領域を持つ研究者たちが解体し、具体的事例を挙げながら「幻想後」の世界のあり方とその言語的可能性を示す試みである。どのようにしてわたしたちは「ことば」を国家単位でとらえるようになったのか、ということから始まり、近代国民国家とその言語政策、ことばを通じた植民地支配、多言語主義に基づく言語、文学、翻訳の可能性などに触れ、「ことば」に関する新しいパースペクティブを紹介している。

人と「ことば」に関する疑問を問題意識のとりかかりとして本書を読み、「言語はコミュニケーションの道具であるだけでなく、世界認識の方法でもある」ことをぜひとも確認してほしい。

その他の参考文献

- ・西成彦著『新編 森のゲリラ 宮澤賢治』平凡社
- ・西川長夫著『国境の越え方―国民国家論序説』平凡社
- ・アペルケビル・ハティビ著／渡辺諒訳『異邦人のフィギュール』水声社
- ・ピエール・ブルデュー著／稲賀繁美訳『話すということ―言語的交換のエコノミー』藤原書店



## エクソフォニー 母語の外へ出る旅

多和田葉子著

岩波書店 二〇〇三

二十世紀文学には、二通りのパラダイムがあるといえよう。ひとつは、ひとつの共同体での体験を、その言語で内部まで掘り下げて書く方法。もうひとつは、一人の作家が、複数の言語や文化、共同体を体験して書く方法。ここでは後者の例として、日本人でありながらドイツ語でも作品を発表している多和田葉子をあげたい。サルマン・ラシユデイらのように旧英国植民地出身の作家が英語で作品を書き、世界的に読まれるようになるというのは、今ではめずらしいことではない。しかし、多和田のように移民や帰国子女でもない者が海外に住み、その国の言葉で創作をし、成功するというのはグローバル化された社会でもまだまれである。

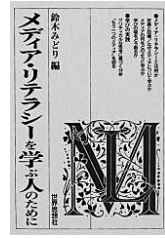
多和田の作品は、物語の断片から新たな物語が創られていたり、好奇心溢れる言葉が重層的に交差したりと、興味深い世界を作っている。そういった物語と詩を自在にあやつる著者が展開した一つの文学思想が本書の題名ともなっている「エクソフォニー」である。この言葉は、私たちが母語の外に出た状態一般を指しているという。「エクソ」的に外に出ていく、つまり私たちがいったん自分の母語の外に出れば、意味が失われ音が聞こえてくるが、その音が再び意味になる前に、あるいは、

再び言葉になる前に、その場で縦横無尽に奏でられる音楽。それがエクソフォニーと呼ばれる。多和田はいう。「わたしはたくさんさんの言語を学習するということが自体にはそれほど興味はない。言葉そのものよりも二カ国語の間の狭間そのものが大切であるような気がする。わたしはA語とB語の間に、詩的な峡谷を見つけて落ちて行きたいのかもしれない」(三十二頁)。

「エクソフォニー」は、亡命や移民といった外側からの言語感覚ではなく、創作者のからだの内側にあるもので、〈ことばにさらされて言葉を書くという〉言語表現者なら誰もが体験している本質的な感覚をあらわしている。本書は、ことばにさらされた者の記録であり、それ自体がことばの身体論ともいえる、斬新な発想と観点から語られており、すぐれて現代的な文学思想である。

その他の参考文献

- ・ 李良枝『由熙・ナビ・タリヨン』講談社文芸文庫
- ・ リービ英雄『星条旗の間こえない部屋』講談社
- ・ 村上春樹『やがて悲しき外国語』講談社



## \*メディア・リテラシーを 学ぶ人のために

鈴木みどり編著

世界思想社 一九九七

「メディア・リテラシー」とは、メディアからの情報を社会的文脈の中で読み解く力、単なる情報の「受け手」ではなく、社会との関りの中でクリティカルに「読み手」としての主体性が問われる能力を指している。本書は、1997年の出版である。当時、オウム事件や松本サリン事件、阪神大震災などの事件や自然災害がニュースとして報道された。報道するメディア自身が多くの問題を露呈し、メディアに対する不信感が高まった時期でもあった。この頃からメディア・リテラシーに対する関心が高まり、メディア・リテラシー教育の必要性を主張する人々が増えた。

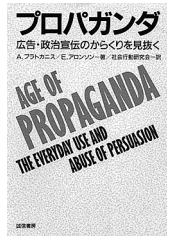
メディア・リテラシーへの関心の高まりは、時代の要請でもある。マス・メディアから一方的に発信される大量の情報を受容する社会システムがインターネットのインフラ整備により、市民が情報を発信するツールを手にした。情報の双方向性である。インターネットはメディアと私たちの関係を大きく変化した。

本書では、理論から実践まで、これからメディアを学ぼうとする人々には最良のテキストである。実践では、テレビのニュース番組やドラマ、広告(CM)、アニメーション番組、新聞、映画、インターネットと幅広く取り上げられている。また理論では、この領域の先駆的研究者であるレン・マスターマンの論文が収録されている。

興味が惹かれる実践記録として、著者(鈴木みどり氏)が大学の学生との共同研究で、阪神大震災発生翌日の今日一日のドキュメントで、NHK、日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京の六つの番組を分析し、火災・崩壊現場・避難所・ガス漏れ……インタビュ・BGMなど多角度に渡って分析を行っている。

その他の参考文献

- ・梅田望夫著『ウェブ進化論』ちくま新書
- ・保岡裕之著『メディアのからくり』ベスト新書
- ・ノーム・チョムスキー著／鈴木主税訳『メディア・コントロール』集英社新書
- ・菅谷明子著『メディア・リテラシー』岩波新書
- ・逢沢明著『ネットワーク思考のすすめ』PHP新書



## プロパガンダ

「広告・政治宣伝のからくりを見抜く」

A・プラトカニス／E・アロンソン著  
社会行動研究会訳

誠信書房 一九九八

1934年、レニ・リーベンシュタールの制作映画「意志の勝利」は20世紀における最も効果的なプロパガンダ映画と言われています。

現代におけるプロパガンダは、アメリカにおける湾岸戦争への武力行使の正当性をアメリカ国民に訴えかけた一人の少女の証言でした。

1990年10月、米国議会下院における公聴会で、15歳のクウェート少女ナイラは産婦人科病院で目撃した一部始終を涙ながらに証言しました。その内容は「乱入してきたイラク兵たちが、生まれたばかりの赤ちゃんを保育器から一人ずつ取り出し、床に投げ捨てて殺した」ということでした。ナイラ証言は全国ネットで放映され、多くのアメリカ国民は残酷なイラク兵に激怒し、クウェートに同情する気運が高まりました。ペトナム戦争で多くの若者を失った米国民は戦争参加に消極的でした。このキャンペーンで一転しました。

大統領をはじめイラク攻撃賛成議員たちは、議会で何度もナイラ証言を繰り返し訴え、国連安保理事会も武力行使を容認し、アメリカ国民を戦争へと導くことになりました。

この湾岸戦争で10万人以上のイラク兵が戦死し、イラクの敗北で終わりました。

その後、ニューヨークタイムズ紙の記者が、ナイラ証言はすべて嘘であり、彼女は駐米クウェート大使の娘であることを明らかにしました。このプロパガンダはクウェート政府が米国のPR会社ヒル&ノートン社に莫大な報酬を支払い、戦争に向けてアメリカの世論を味方につけることに成功しました。

本書では、現代に生きる私たちが、大衆操作の企てや集団規模の説得の標的になっていることに警笛を鳴らし、プロパガンダのからくりを見抜く方法を提供しています。今日におけるメディアの進化は、より複雑で洗練されたプロパガンダ・テクニックが使用されます。特に、インターネット時代に交換される情報が、フェアなメッセージなのか騙しの手口なのかを見抜くスキルが要求されます。一読をお勧めします。

その他の参考文献

- ・ギュスターヴ・ル・ボン著／桜井成夫訳『群衆心理』講談社学術文庫
- ・ノーム・チョムスキー著／本橋哲也訳『メディアとプロパガンダ』青土社
- ・ノーム・チョムスキー著／鈴木主税訳『メディア・コントロール』正義なき民主主義と国際社会』集英社新書
- ・セバスタン・ロファ著／原正人、古永真一、中島万紀子共訳『アニメとプロパガンダ』法政大学出版局



### \*漢文脈の近代

斎藤希史著

名古屋大学出版会 二〇〇五

この本の扱っている主題というのは、「十九世紀後半から二十世紀にかけて、かつてないほど相互に交通し作用しあった日本と中国に起きた *ecriture* の変容である。そこに生じた「漢文脈」の新たな展開を、文学史・小説・翻訳・作文など、書くことと読むことの場合に即して捉え、近代の意味を問う論考」であると、著者ははじめに示している。

推敲としては、著者が自ら示しているように、「テキストを単一において理解するのでなく、複数のテキストの間において理解する」という研究方法をとっている。これによって行文には自在に文献を操り、興味深い指摘が随所見かけられる。その一例を挙げてみよう。

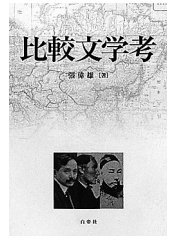
第II部「梁啓超と近代文学」において、梁啓超と日本文学の関係を簡単に「影響や受容」という捉え方を採らないで、梁啓超が明治日本との関わりの中で、新しい小説論の構築ができたのは、その間に「文脈」が存在していたからだ、問題提起をしている。文中では「粵語」を母語とする梁啓超の出自から、

光緒帝に謁見を賜ったにもかかわらず、大した出世も叶わない「真相」を一つの切口にし、梁啓超の言語意識を突き止める。梁啓超にとって「文」としての文言がある一方、実用性に徹した「質」の言語もある。この文脈から梁啓超にとっての粵語の存在意味が見出せ、彼にとっての日本語の位置付けも十分に把握することができたのである。

本書はまた小細工に懲り特殊な学界用語をふりかざし中核が不可解のままにしておく類いのものとは違い、入門者にとっても十分読解可能なものである。学術図書であると同時に、平易明晰で楽しく読むことのできる一冊である。

その他の参考文献

- ・溝口雄三『中国の衝撃』東京大学出版会 一九八九年六月
- ・蔡毅(編集)『日本における中国伝統文化』勉誠出版 二〇〇二年四月
- ・浜下武志『東アジア世界の地域ネットワーク』国際文化交流推進協会 一九九九年五月
- ・中野美代子『乾隆帝―その政治の図像学』(新書)文藝春秋 二〇〇七年四月



## 比較文学考

張偉雄著

白帝社 二〇一一年

比較文学文化研究は、一国の文学文化現象を世界の文学文化現象の大海に放出して考察するようなもので、研究方法としては影響研究、対比研究など多岐にわたって行われてきたが、近年来、翻訳の研究や、異文化理解の研究なども盛んに行われている。異文化理解とは何かを考えると、「異文化をまたがって生きた人物」に焦点を当てることは、一種の有効な手段である。ダイナミックな文化交流の中で、同化、統合、共生といった複雑な相互作用を通して、自文化や異文化は再構築されたり、再生産されたりするのである。文化交流の重要な媒体である人物の異文化体験を考察することは、こういった再構築された文化を解明する鍵でもある。

近代以来、日本や中国において多くの異文化体験の先駆者がいた。かれらは貴重な体験をもとに、数多くの異文化体験談を残してくれた。その数多くの異文化論の中から、たまた非常に排他的、攻撃的な異文化論も見当たりますが、異文化を自分自身の文化的養分として積極的に吸収し、自文化、異文化にも多大な貢献を成し遂げてきた人物も多く存在している。本書では外交官の黄遵憲や同時代の牧野義雄などに焦点を当てて、異文化理解、共生のメカニズムを探索してみる。

比較文学文化研究の方法論として、「翻訳研究」は東アジアにおいて盛んに行われているものである。本書ではイギリスの東洋学者、翻訳者である Arthur Waley を中心に、翻訳における「変容」の実態及び原因を分析してみる。

翻訳者の Arthur Waley は文学者に対する最大の理解者の一人である。「文学者はいかほどの感情、喜怒哀楽というものを作品に注いでいるので、訳者がそれを感じとれなくて、単に無味乾燥に辞書に載っている言葉を羅列するに止まったら、まったく原作を代訳する資格がない！」かれはこのように発言し翻訳活動を実践している。一国の作品を外国語に翻訳するとき、翻訳者は意識的に或いは無意識的にどうしても自ら翻訳文に潜り込んで、自分の感動を翻訳文の読者に与えようとするのである。これは文学の翻訳は一種の再創作であると言われる所以である。Arthur Waley の翻訳には、再創作による変容が多く見える。翻訳の変容を指摘することによって、異文化に位置する原作者、翻訳者、或いはその両文化に位置する読者層に対する認識を深めていく事ができ、異文化理解につながるものである。本書は以上のような角度で「異文化理解」と「翻訳の変容」の両端を探索してみるものである。

## ファビオ・ランベツリ

比較宗教・文化記号論／日本とイタリアの  
比較宗教・日本におけるインド文化の影響



## アザー・サイド\*

イシュトバン・バンニヤイ著

ブッキング 二〇〇六

異文化の理解は「異化」から始まることが多い。異化とは、私達の周りにある、ごく普通で日常的なものごとになにか不思議な感じを覚えて、それらを違う目で見ると切っ掛けになる、ということです。自文化を違う目で見ると見ようになつたら、それまで想像もしなかった多様性・複雑性・重層性などが見えてきます。異化によるこの自文化の多様性の意識こそ、異文化の研究と理解に欠かせないことです。

しかし、異化は自然に生まれてこないのです、異化を生み出す態度を育てるのに様々な練習や体験が非必要ですが、異化は型に囚われないまたは型を破る感性なので、型を教えるマニュアルではなかなか身に付かないでしょう。

そこで、異化という感性を身に付けたい人には、この本を強く勧めます。著者のバンニヤイさんはハンガリー出身ニューヨーク在住のイラストレータで、その作品には非常に面白い物事の見方が提示されるのです。この『アザー・サイド』では、タイトルからもわかるように、各ページの映像を次のページに

違う観点、関連性・枠組み——いわば「向こうから」見る試みです。頭が痛くなるほどのビジュアルなアドベンチャーを読者に経験させてくれます。結果的には、映像の向こう側にいる相手の立場に立って世界（私たちも含めて）を違う目で見て、数多くの新しい関連性を意識して、本を読み終わるともつと豊かな世界、もつと豊かな自分を発見することになるでしょう。ゼミのテーマとは直接関係のない本ですが、ものごとの新しい見方そのものを感覚的に教えてくれるということで、貴重な教材になると思います。

その他の参考文献

- イシュトバン・バンニヤイ『ZOOMズーム』ブッキング
- イシュトバン・バンニヤイ『RE-ZOOMリズム』ブッキング



女の子のための

現代アート入門

女の子のための現代アート  
入門 MOTコレクションを中心に

長谷川祐子編

淡交社 二〇一〇

この本は、アートを通して自分の柔らかい感性と向き合い、「自分の心を自由のなかに解き放ちたい」と願う女の子のための現代アート入門書です。筆者は、東京都現代美術館キュレーター（学芸員）の長谷川祐子氏。キュレーター（学芸員）とは、美術館や博物館で展覧会を企画し、アートと人々の出会いの場を創造する人です。

アートは、アーティストが生まれてから見てきたものすべての集積を、こころのフィルターで濾過し、現実世界のなかで表現したものです。そこでは通常の世界観が反転して存在しています。たとえば自分の傷つきやすさは敏感な感覚の現れとして、不安や反発は、社会の常識に対して自分の特異性を自覚しつづける心の強さとして受けとめられます。このようなアートが、本書では数多く紹介されており、自分の世界をより豊かに広げていくことができるでしょう。

長谷川氏は、「ふにゃふにゃの、自分の形がまたきまらない、でも変わりたいと思っているたよりない女の子が、いろんな

アートに出会ったたび、『よくわからないけれど、なんだかか惹きつけられたり』、『目をそむけたくなくなるけど、記憶に焼きついて離れないので、おそろおそろ戻ってみよう』と感じたとき、この本を思い出して欲しいと述べていますが、性別に関係なく、若々しい感性を持ったすべての学生に読んでもらいたい一冊です。

そのほかの参考文献

- 三浦篤著『まなざしのレッスン1 西洋伝統絵画』東京大学出版会 二〇〇一
- ホンマタカシ著『たのしい写真 よい子のための写真教室』平凡社 二〇〇九

## 川村清志

文化人類学、映像文化論

\*新編・鬼の玉手箱  
— 外部性の民俗学 —

小松和彦著

福武書店 一九九一

呪いや憑物、鬼というと、オカルト小説や映画、あるいはファンタジーの世界のことだと思われがちです。しかし、日本の文化の奥底には、このような「闇」の部分が常に潜んでいます。

筆者の小松和彦さんは文化人類学者で、日本の民俗文化の「闇」の部分に注目して研究してこられた方です。小松さんは中世以後の昔話や伝説を文化人類学的な構造分析の手法を用いて考察する一方で、四国の山村でのフィールドワークを通して、「いざなぎ流」という謎に満ちた民俗宗教の研究も続けてこられました。

この本は、小松さんが自身の研究テーマを選んだ過程やフィールドワークの体験、そこで得られた成果をわかりやくまとめた本です。自らがフィールド先で「祟り」にあった経験なども紹介しつつ、「異人殺し」や「憑霊」、「犬神」、「河童」などの分析が、矢継ぎばやに進められていきます。一読されれ

ば、ここに登場する不可思議な昔話、伝説、そして民俗宗教は、日本文化を陰から支える重要な役割を果たしてきたことが理解できるでしょう。

しかもこのような民俗文化は、単に歴史資料のなかの存在ではありません。それらの一端は、今日のフィールドワークを通しても接近することが可能なのです。そのような説話や信仰は、独自の世界観のもとに存在し、多くの人々に共有されてきたことも、この本は教えてくれます。

さらに本の後半では、一連の妖怪ブームや、「口裂け女」のような都市伝説についての検証もなされています。そこで記された分析の視点は、現在のメディアミックスのなかで展開するゲームやアニメのファンタジー世界を考察するうえでも、重要なヒントを与えてくれるでしょう。

## 他の参考文献

- ・ 柳田国男『妖怪談義』講談社学術文庫
- ・ 岡野弘彦『折口信夫の晩年』中公文庫
- ・ 山口昌男『道化の民俗学』ちくま文庫
- ・ 中沢新一『僕の叔父さん網野善彦』集英社新書



日本の時代史<sup>\*</sup>19  
蝦夷島と北方世界

菊池勇夫編

吉川弘文館 二〇〇三

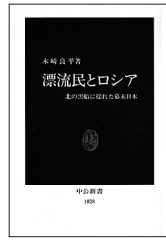
これまで多くの日本史の通史が編さん・発行されているが、蝦夷地や北海道がその一冊に加えられたのは、本書が初めてである。それも日本史関係出版では、最も定評のある吉川弘文館の通史に納められた意義は大きい。

北海道を中心とした北方の歴史は、古くは旧石器時代から縄文時代・続縄文時代・オホーツク文化時代・擦文文化時代という考古学的な時代から、アイヌの時代へと移行する。さらにこのアイヌの時代は、日本史では古代・中世・近世・近現代と重なる。この蝦夷地の中心にいた人は、アイヌであった。アイヌ民族の歴史はそれ自体、研究が進んでいるが、アイヌ民族は自らの文字を持たなかったことから、歴史を復元するのが難しい。現在では、歴史学（文献学）をはじめ、考古学・民族学・美術史などからの研究により、その歴史が少しずつ明らかになりつつある。そこで重要なのは、いつの時代でもアイヌ民族が孤立していたのではなく、周辺地域との活発な交流・交易を通じて、アイヌ社会が成立していたことである。

本書は、以上の課題によって六人の執筆者によって、次のテーマにより構成されている。「蝦夷島と北方世界」（菊池勇夫）・「北方社会の物質文化」（越田賢一郎）・「北東アジアからみたアイヌ」（榎森進）・「アイヌ女性の生活」（児島恭子）・「アイヌの『自分稼』」（谷本晃久）・「蝦夷島の開発と環境」（菊池勇夫）・「日露関係のなかのアイヌ」（川上淳）  
本書により、北方史の柱に足を踏み入れ、豊かな北方社会の歴史を学んでみよう。

その他の参考文献

- ・榎森進著『アイヌ民族の歴史』草風館 二〇〇七
- ・菊池勇夫著『アイヌ民族と日本人 東アジアのなかの蝦夷地』朝日選書 朝日新聞社 一九九四
- ・根室シンポジウム実行委員会編『三十七本のイナウー寛政アイヌの蜂起二〇〇年』北海道出版企画センター 一九九〇
- ・藤田覚著『松平定信』中公新書 中央公論社 一九九三
- ・山本博文著『日本史の一級史料』光文社新書 光文社 二〇〇六



## 漂流民とロシア 北の黒船に揺れた幕末日本

木崎良平著

中公新書 一九九一

江戸時代に日本からロシアへ漂流した者が多数いた。一番有名なのは、伊勢の漂流民大黒屋光太夫であろう。また、日本の歴史に記録されていない伝兵衛やゴンザなどもいたことが、ロシアの記録で分かっている。

著者の木崎良平氏は、ロシア史の研究者であったが、日本からの漂流民を研究した第一人者でもあった。本書はその研究成果を一般向けに分かり易く著されている。しかし、それぞれの漂流については詳細に記述されていて、ロシアへの漂流民について知る研究の出発点として、是非とも参考にするべき一冊となっている。

本書が目指したのは、ただの詳細・正確という歴史事実の洗い出しではない。明治政府が江戸幕府の否定の上に成立し、江戸時代を「鎖国」としたことへの批判である。最近では高校教科書でも「鎖国」は訂正されつつあるが、「鎖国三〇〇年の史観」が生き残っていると、本書は、こうした古い歴史観を乗り越え、日本の「鎖国」への道程を見直し、新しい歴史観の形成を提唱している。

なお、私は北方史をロシアとの関係からも研究しており、日本人のロシアへの漂流記録は、研究史料として欠かせない。い

つもこの本を参考に研究を進めている。私事になるが私が立正大学大学院に在籍したときに、木崎先生が教鞭を執っておられた。先生は西洋史専攻の学生に教えており、私は日本史専攻であったので直接先生の講義は受けていなかった。先生に教える請うたのは、卒業してからである。手紙のやりとりを何度も繰り返し、出張のときにはお目にかかり、ついには講演にまで来ていただいたこともあった。この木崎先生も鬼籍に入られ、今はこうした著作からしか学ぶ事ができないのは残念である。漂流民を通して、江戸時代の日本や対外関係を考える優れた著作であり、特に歴史を学ぶ学生にお薦めの一冊である。

### その他の参考文献

- ・ 亀井高孝校訂『北槎聞略』岩波文庫 一九九〇
- ・ 木崎良平著『光太夫とラクスマン 幕末日露交渉史の側面』刀水書房 一九九二
- ・ 木崎良平著『仙台漂流民とレザノフ 幕末日露交渉史の側面 No.2』刀水書房 一九九七

下川和夫

自然地理学／自然の見方・景観の読み方・自然と人びとの生活



景観の分析と保護のための  
地生態学入門

横山秀司編

古今書院 二七七頁 二〇〇一

自然破壊、公害などの環境問題、そして自然災害などの諸問題は、自然と私たち人類の關係に破綻が生じた時に顕在化する現象である。地理学は人間と自然の關係を地域において問題にする学問だから、地理学はこれらの問題解決に大きな役割を果たせる学問領域といえる。

ところでドイツでは一九七〇年代以降に、自然保護や環境保全、自然災害を考える際に生態学的視点が重視されるようになり、自然と調和し、自然と共生する地域づくりが積極的に進められるようになったが、その際に地生態学的分析をベースとした計画立案が行われている（横山、一九九五）。つまり健全な環境を保全するために、地生態学の手法が応用されてきた。

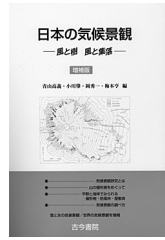
本書は地理学、環境科学の分野の研究者10名が、冒頭の問題に対処するための手法を提案した専門書で、教科書でもある。まず最初に、地生態学研究の先進地域である欧米諸国における研究動向が紹介され、第2章では景観構成要素である地因子に焦点を当て、地生態学へのアプローチの具体的方法が示さ

れる。次いで国内のいくつかの地域における実践的研究が応用例として例示されている。ちなみに下川は第2章5節で地生態学を積雪環境からアプローチする方法を紹介し、また第3章3節では研究例として美瑛の丘の景観とその変遷及び観光問題を担当した。美瑛は2年生のゼミで合宿を行ってきた場所でもある。

日本の各地域で「自然と人びとの生活」を主題に、おもに地域の気候環境と生活文化の關係を、現地調査によって明らかにすることを目的としてきた下川ゼミにとって、本書は地域における自然と私たちの關係を考える際の基本的なテキストである。

参考文献

- ・青山高義ほか『日本の気候景観』古今書院 二〇〇〇 一八一頁
- ・小泉武栄ほか『山の自然学入門』古今書院 一九九二 一八七頁
- ・小崎尚研究室編『山に学ぶ』古今書院 二〇〇五 一四一頁
- ・シリーズ『自然景観の読み方1〜12（全12冊）』（一九九二〜一九九四）岩波書店
- ・横山秀司『景観生態学』古今書院 一九九五 二〇七頁



## 日本の気候景観 —風と樹 風と集落—

青山高義・小川肇・岡秀一・梅本亨編  
古今書院 二〇五頁 二〇〇九

「♪誰が風を 見たでしよう 僕もあなたも 見やしないけれど木の葉を 顫わせて 風は通りぬけてゆく♪」これはイギリスの詩を西條八十が訳した「風」という童謡で、中高年の人には懐かしい歌である。風そのものは見えないのだが、揺れる木々を通してその流れが目に見えるような詩である。

目には見えない気象現象が、継続し卓越して作用すると、目に見える形で地形や植生（自然、人間の生活（人文））にその痕跡を残すことがある。それを気候景観という。たとえば、その時に風が吹いて木々を揺らしていなくても、傾いた幹やなびいたような枝ぶりなどを通して、その場所の風に関する情報を見てとることができる。

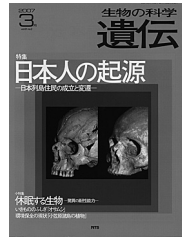
気候景観という用語を最初に使った矢澤（一九五三）によれば、気候景観とは「気候特性の表現体と考えた場合の自然・人文景観の総称である」という。言い換えれば「地表の状態が気候の影響によってそれぞれの地域特有な様相を呈しているとき、それを気候景観」（吉野ほか、一九八五）といい、いわば気候環境に対する自然や人間の反応が景観に表れたものといえる。

本書では、日本各地の樹木や植生、家屋や集落等の景観の中

から風に関係する気候景観が抽出され、例示されている。もちろん気候景観を造り出す気象・気候要素は風だけでなく、気温、降水、積雪、湿度、日照などさまざまである。しかし、風を主たるテーマに置いているのは、風の影響が多様で、しかも顕著に表れる場合が多く、研究例が最も多いからであろう。また私たちの日常生活、生産活動（とくに農林水産業）において、最も注意を払うべき気象現象のひとつだからであろう。たとえば日本各地には名前を持った風が数多く知られており、その数は二、一四五種にも及ぶという（関口、一九八五）。東北の「やませ」、北関東の「空っ風」は誰もが知っている局地風である。また阪神ファンなら応援歌「六甲おろし」を思い出すかもしれない。本書によれば六甲嵐はボラ型のフェーンだということ。ちなみにこの本で紹介されている北海道の事例は、大雪山の尻尾状植生、斜里平野の防風林、根釧台地や利尻山の偏形樹の研究などである。「地域における自然と人の関わり」をゼミのテーマとする下川ゼミでは、この本は基本的な資料のひとつとなっている。

### 参考文献

- ・関口武『風の事典』原書房 一九八五 九六一頁
- ・矢澤大二『気候景観』古今書院 一九五三 二二七頁
- ・吉野正敏ほか編『気候学・気象学辞典』二宮書店 一九八五 七四二頁



**\*生物の科学 遺伝  
特集 日本人の起源**

エヌ・ティイー・エス 二〇〇七年三月

ヒトの歴史は四百万年〜五百万年といわれているが、最近の調査によると、もっと古くなる可能性もありそうだ。チャールス・ダーウィンが予言したように、ヒトの祖先はアフリカ大陸で生まれ、進化した。そして、その一部がアフリカ大陸を出て、世界中に拡散した。もちろん、日本へも。つまり、日本人とアフリカ人は、実は大変近い兄弟なのである。では、その「兄」からいつ頃後に日本人の祖先は進化し、日本列島へわたってきたのだろうか。

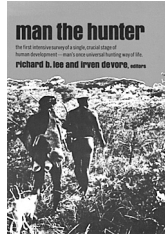
『日本人の起源』というテーマは、多くの日本人にとって大変魅力的なテーマであろう。このテーマに関して、最新の情報を提供しているのが、ここで紹介する雑誌である。『日本人の起源』を理解するためには、表紙にあるような古人骨学的アプローチが一般的な方法である。本特集では、まず、人骨からどのような『日本人起源論』が提唱されたか、簡単に研究史をまとめていく。さらに、古人骨から明らかになりつつある『日本人起源論』に加えて、遺伝学やDNA等、最近進歩の目覚まし

い分野における最新のデータも紹介されている。この最新の情報によると、人骨からみると、現代日本人の祖先は南方系であったといわれているが、遺伝子やDNAからみると、北方系らしい。つまり、『日本人の起源』に関しては、まだ十分な答えは出ていない。が、実はここまで理解するのに百年以上かかっている。数年後にはもっとはっきりした答えが出るのでは。

これらのテーマに加えて、過去の人々の食性や健康状態についての論文も掲載されている。また、明治から今日までに日本人の体つきは、大きく変化しただろう。どのように？ ちょっと難しい論文が多いが、このようなテーマに関心ある人はトライしてみよう。

その他の参考文献

- 中橋孝博 『日本人の起源』 講談社
- 池田次郎 『日本人のきた道』 朝日新聞社
- 埴原和郎 『日本人の起源』 朝日新聞社
- 山口敏 『日本人の生い立ち』 みすず書店
- 鈴木尚 『化石サルから日本人まで』 岩波書店
- 『原日本人』 朝日ワンテームマガジン14 朝日新聞社
- 『人類学がわかる』 AERA Mook 8 朝日新聞社



## Man the Hunter

Richard Lee and Irven DeVore 編

一九六八

本書は論文集であるが、人類学という学問に革新をもたらした書物の一冊である。編者の一人であるRichard Leeは一九六三年にカラハリ砂漠に住む狩猟採集民Kung, Sanの科学的な研究を開始したが、Leeの研究以前には、狩猟採集民は「野蛮、遅れている、一日中食料探しをしている」と考えられていた。しかし、Leeの研究により、前述の固定観念的な解釈とは百八十度異なる狩猟採集民像が明らかとなった。Kung, Sanの生活の舞台は、カラハリ砂漠というヒトにとって大変過酷な環境であったにもかかわらず、彼らの労働時間は極端に短く、彼らは彼らの環境を熟知し、食料獲得に何の不自由のない生活を送っていたのである。

一九六〇年代にはその他の地域でも狩猟採集民の研究が実施されていた。一九六六年にシカゴ大学においてこれらの研究者が一堂に会し、狩猟採集民に関するシンポジウムが開催された。このシンポジウムを元にしたのが本論文集である。何度この論文集を開いてもゾクゾクするのだが、人類学の錚々たる研究者七十名以上によるシンポジウムであった。一九六〇年代までにその存在が確認された世界中の多くの狩猟採集民を対象としている。すなわち、アフリカ、東南アジア、アジア、オース

トラリア、北・南アメリカ大陸に分布した狩猟採集民である。さらに、過去における狩猟採集民に関する情報提供ということ、考古学者等による報告も含まれている。

このシンポジウムを通して理解されたことは、北米西海岸に居住する狩猟採集民のように「例外的」な狩猟採集民は存在するものの、多様な環境に分布する狩猟採集民ではあるが、アフリカの砂漠や熱帯雨林であろうと、オーストラリアの砂漠であろうと、北極圏に住む狩猟採集民であろうと、農耕民や私どもよりはよっぽど楽な生活を送っていたということである。それゆえ、ヒトの歴史の九十九%以上が狩猟採集の時代であったのである。

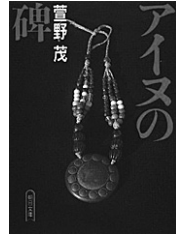
### その他の参考文献

- マーシャル・サーリンズ『石器時代の経済学』法政大学出版局
- 田中二郎『カラハリ狩猟採集民―過去と現在』京都大学出版界
- スチュアート・ヘンリ『採集狩猟民の現在』言叢社
- Ed. by Lee, R. *Hunters and Gatherers*, Cambridge Univ. Press.



本田優子

アイヌ語・アイヌ文化



## アイヌの碑\*

萱野茂著

朝日新聞社

初版一九八〇年・文庫版一九九〇年

本書は、二風谷（日高支庁管内平取町）という集落に生まれ育ったアイヌ、萱野茂氏（一九二六～二〇〇六）の自伝である。二風谷は人口五〇〇人に満たない小さな村だが、アイヌの伝統的な習俗が息づく地域として内外に知られている。

萱野氏が子どもの頃は、まだ多くのアイヌの人々が、チセと呼ばれる茅葺き屋根の住居で暮らしており、カムイノミ（神への祈り）など、アイヌの伝統的な儀礼も各家庭で伝承されていた。しかし、日常会話の多くはすでに日本語に変わっており、萱野氏は流ちょうなアイヌ語を家庭の中で身につけた最後の世代の一人だといわれる。萱野氏が生きたのは、まさに現代の日本社会の中でアイヌのコミュニティのあり方が大きく変容した激動の時代であり、本書は単に一人のアイヌの人生の記録にとどまらず、近現代のアイヌ社会を理解するための必読書といえる。

萱野氏は本書の最後の部分で、アイヌ語を教えるための幼稚園を作り、その園長になりたいとの夢を語っている。刊行から

三年後の一九八三年、私は萱野氏の助手として二風谷に移り住んだ。そして、幼稚園の代わりに「二風谷アイヌ語塾」を創設するお手伝いをし、その後十一年間、アイヌの子どもたちに対するアイヌ語教育に関わりながら、二風谷の住人として暮らし続けた。当時私が住んでいた家は、現在、我がゼミの夏の合宿所となっている。それゆえ、特に私のゼミを希望する人々には、私の研究の礎となっている二風谷という土地の歴史や、そこに流れる風の匂いを知ってほしいと願っている。

本書はそのための最初の一步となるにちがいない。

その他の参考文献

- ・萱野茂『アイヌの昔話』平凡社ライブラリー 一九九三
- ・中川裕『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー 一九九七
- ・池澤夏樹『静かな大地』朝日新聞社 二〇〇三
- ・瀬川拓郎『アイヌの歴史』講談社選書メチエ 二〇〇七
- ・姜戎著／唐亜明・関野喜久子訳『神なるオオカミ（上下）』講談社 二〇〇七（アイヌ文化に直接関係はしないが、オオカミ神の位置づけを考える上で大きな示唆を得た。とにかく面白い）



## ゲド戦記

アーシュラ・K・ルীগウイン 著

清水眞砂子訳 全六巻

岩波書店 一九七四～二〇〇四

ファンタジーの代表作として、世界中の人々に愛されている『ゲド戦記』。基本的には、アースシーという多島世界に生きる魔法使いゲドの物語だが、一巻と六巻では、物語のテーマも主人公も大きく変化している。第一巻「影との戦い」では、少年時代のゲドが「影」との対決により自己を確立する。第二巻「こわれた腕輪」は、後にゲドの妻となるテナーという巫女との物語。第三巻「さいはての島」では、クモという男との戦いを通して生と死を考える。第四巻以降、ゲドは魔法の力を失ってしまいが、その意味するものを、作者は女性ならではの視点で描いている。

ルীগウインは、文化人類学者だった父の影響を受け、幼い頃から先住民族の文化、神話や価値観に親しんで育ったという。それゆえだろうか、アイヌ文化を専攻する私にとって、この壮大な物語はファンタジーであるにもかかわらず、とても身近な感覚がある。たとえば、「名前」というものが有する特別の意味や名前を呼ぶことにまつわる禁忌は、この物語の主題の一つであるが、これはアイヌに限らず、古代の日本も含め様々な民族に見られるものである。

ゲドを含むアースシーの多くの人々が褐色の肌をしているこ

とも、ルীগウインの関心のあり方をうかがうことができ。しかし彼女は、一般に先住民族の世界観とステレオタイプに結びつけられがちな「善」を、第五巻では根底から覆してみせた。そのうえで、世界の成り立ちや正義についての価値観を再構築する手法は、見事としか言いようがない。

二〇〇八年二月の文化学会大会では、本書の翻訳者である清水眞砂子氏をお招きし、記念講演「ゲドを聴く」が開催された。講演前には、本田を含む本学会員によるトーク「ゲドを語る」も行われており、いずれも本学会の紀要『危機と文化』第一〇号に所収されている。併せて紹介しておきたい。

その他の参考文献

- 清水眞砂子『「ゲド戦記」の世界』岩波ブックスレット 二〇〇六
- 上橋菜穂子『獣の奏者』全五巻 講談社 二〇〇六
- 坂田美奈子『アイヌ口承文学の認識論（エピステモロジー）―歴史の方法としてのアイヌ散文説話』お茶の水書房 二〇一



\* 私の平和論

日高六郎著

岩波新書 一九九五

私たちはゼミで、この二十世紀および二十一世紀またがる百年間の歴史を具体的な出来事を通して見つけていく。教科書的な資料に目を通すのもさることながら、個々人の体験に根ざした文献を探して読んでいく。

例えば、時代を、父の目と子の目をつないで捉えることを考えている。親と子の目をつなぐと、そこで一つの時代と言つてよいほどの「歴史」に近づくことができるかもしれない。もともと信頼する父の目と自分自身の目でこの社会を見つめるのである（日高六郎『私の平和論』）。

そして、明治、大正、昭和の日本と朝鮮半島、中国大陸、ヨーロッパ、アメリカの近現代史を同時に捉えていくことを試みる。

私は、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そしてこの度、イラクのフセイン政権の崩壊を目の当たりにした。その生々しい記憶を鮮明に持っている。その体験を、その時代特有の感性と時代を包む雰囲気、最愛の家族に、友人知人に伝えることができれば

と思っている。ゼミ参加者のみなとこうした戦争の背景を探りながら、平和の尊さ、そして非戦・反戦の思想についても語ってみたいと思う。

その他の参考文献

- ・日高六郎『戦後思想を考える』岩波新書 一九八〇
- ・E・H・カー『危機の二十年』岩波文庫 一九九六
- ・E・H・カー『歴史とは何か』岩波新書 一九六二
- ・神谷不二『朝鮮戦争』中公文庫 一九九〇
- ・古田元夫『ベトナムの世界史』東京大学出版会 一九九五
- ・竹前栄治『GHQ』岩波新書 一九八三
- ・ジョージ・F・ケナン『アメリカ外交五〇年』岩波現代文庫 二〇〇〇



## 朝鮮現代史の岐路 （八・一五から何処へ）

李景珉著

平凡社 一九九六

現代朝鮮をどう捉えるか

一九四五年八月一日、朝鮮は「光復」を迎えた。「子供も飛び跳ね万歳、大人も飛び跳ね万歳」彷徨する朝鮮総督府と在住日本人。北からはソ連軍の進攻、沖縄からは進駐米軍。朝鮮建国準備委員会の活動が広まる一方、昨日までの「新日派」の困惑は深まる。米ソの駆引きを背景に展開された「解放政局」の激動のドラマを丹念に追究し、南北朝鮮の今日を決定づけたルーツを探る。とりわけ朝鮮のその後の展開を見るさいに、この半年が持つ意味の重さは決定的であろう。

第二次世界大戦後、日本の植民地統治下にあった朝鮮半島が南北に分断された背景には、一般に二つの理由を挙げることができる。まずは国際的要因として、大戦の終結の間際に働いた米ソの思惑がある。そして国内要因に、戦後世界をめぐるイデオロギーの対立が、朝鮮民族の内部にもその影響を及ぼし、二つの敵対感情を植え付け、それが分断へとつながったと考えられる。

ところで、韓国の研究者のなかには、従来の国際政治を重視する考えから、最近では分断にいたる過程で、朝鮮民族の自己省

察をいっそう掘り下げていく傾向が見られる。分断の理由を米ソの対立の産物として捉えるのではなく、朝鮮民族にその根源的な責任があると厳しく追求する考えに、変わってきている。現代朝鮮の歴史の流れを、「体系的に理解する」ことができればと思っている。

朝鮮分断の要因を、史料にもとづいて考察していく。そして、将来の「統一」について、その展望を模索してみたい。関連文献として、以下の資料を取り上げる。

- 森田芳夫『朝鮮終戦のソ兩軍の進駐と日本人の引揚』巖南堂書店 一九六四
- 小此木政夫『朝鮮戦争―米国の介入過程』中央公論社 一九八六
- 武田幸男編『朝鮮史』山川出版社 二〇〇〇
- 鄭敬謨『ある韓国人のこころ―朝鮮統一の夜明けに』朝日新聞社 一九七二
- Bruce Cumings, *The Origins of the Korean War: Liberation and the Emergence of the Separate Regimes, 1945-1947: The Roaring of the Cataract, 1947-1950*, 2 vols. Princeton University Press, 1981, 1990（鄭敬謨など訳『朝鮮戦争の起源―解放と南北分断体制の出現』全二巻 シアレヒム社（影書房）、一九八九、一九九一）
- Andre Schmid, *Korea Between Empires, 1895-1919*, Columbia University Press, 2002（糟谷憲一など訳『帝国のはざま―朝鮮近代とナショナリズム』名古屋大学出版会、二〇〇七）

金 誠

スポーツ史／スポーツの社会史、スポーツと政治



\*  
スポーツ史講義

稲垣正浩・谷釜了正 編著

大修館書店 一九九五

現在行われているスポーツをイメージすると、オリンピックやワールドカップ、あるいは世界陸上や世界水泳など、世界規模のスポーツイベントが頭に浮かびやすいだろう。

これらのスポーツやスポーツイベントも、今の姿になるまでにはいくつかの道のりを経てきている。当然、今あるスポーツを取り巻く状況もまた然りである。

スポーツの歴史を学ぶということは、我々の頭に浮かぶスポーツ、すなわち今あるスポーツの状況を再考することでもあり、また現在行われているスポーツそのものの楽しみ方を広げるといってもある。

本書はそうしたスポーツのとらえ方を、歴史的な側面から解説してくれる。ゼミに入ってスポーツの歴史を学んでみたいと思う人たちにも最適であるし、ゼミには入らないがスポーツの歴史に少し興味があるといった人たちにもお勧めできる。

本書は、「第Ⅰ部 スポーツ史研究法」「第Ⅱ部 スポーツ史概説」「第Ⅲ部 スポーツの個別史」の3部で構成されており、それぞれが独立したトピックになっている。そのため、初学者には第Ⅱ部のスポーツ史概説を読み進めてみて、スポーツの歴史の概要を理解してみるのもいい。古代から現代までのスポーツの変遷や、現在のスポーツ文化の姿をとらえなおすことができるだろう。

あるいは第Ⅲ部のスポーツの個別史において、興味あるスポーツ史のケーススタディーをピックアップして読み進めてみるのも面白い。様々な事例のなかで、これまで知らなかったスポーツの姿に出会えることができるのではないだろうか。

その他の参考文献

- ・寒川恒夫編『図説 スポーツ史』朝倉書店
- ・坂上康博『スポーツと政治』日本史リブレット 山川出版社
- ・竹岡敬温・川北稔編『社会史への途』有斐閣選書
- ・三浦雅士『身体の零度』講談社選書メチエ
- ・森田浩之『スポーツニュースは悪い』生活人新書 日本放送出版協会

今、なぜ  
武道か

▼文化と伝承を問う  
中村 民雄著

今、なぜ武道か  
—文化と伝承を問う—

中村民雄著

日本武道館 二〇〇七

二〇〇七年九月、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで、世界柔道選手権が開催され、優勝の期待のかかる井上康生選手、鈴木桂治選手はともに敗れました。その際、斎藤仁日本代表監督は、「こんなものは、ジュウドウではない」とコメントしたそうです。さて、この「ジュウドウ」とは、柔道か？ それともJUDOなのか？ この問いは、柔道とJUDOの違いについて理解していないと解けません。

さて、平成二十四年度から中学校の学校体育で男女ともに武道が必修化されました。国際社会で活躍する日本人は、歴史と伝統によって培われた日本の文化を教養として身につけるべきとの方針により、体育分野では武道が選ばれました。

ここでごく簡単に武道の歴史に触れてみますと、いくつかの転換期を経ていることがわかります。まず明治初期の文明開化が進められた頃には、欧米産のスポーツが移入され武術は排除されていきました。ところが、帝国主義運動の気運が高まる時代に、武術は武道として統一されます。武道は心身ともに臣民

育成に役立ちました。だからこそ、戦後民主化運動の中では、武道は再び排除されます。そして、武道界はみずから競技スポーツの道を選び、復興をとげます。一九六四年の東京オリンピック以降、柔道が正式種目として採用されると、武道はまたたくまに競技スポーツのBUDOとして世界に広がっていきます。そして、今、BUDOと武道の違いについて問われているのです。

今、最もグローバル化した文化であるスポーツ文化。武道／BUDOは、日本のスポーツ文化として世界に広まったもののひとつです。今回、ここで紹介する著作は、こうした武道／BUDOについて学ぶのに最適なものを選びました。

ぜひ、柔道とJUDOの違いを考えてみてください。

その他の参考文献

- 笹間良彦著『図説 日本武道辞典』柏書房
- 日本武道館編『日本の武道』日本武道館
- 渡辺一郎編『武道の名著』東京コピー出版部
- 今村嘉雄著『十九世紀に於ける日本体育の研究 修訂』第一書房



## 近代スポーツのミッションは終わったか 身体・メディア・世界

稲垣正浩・今福龍太・西谷修

平凡社 二〇〇九

二〇一二年七月二十七日イギリス・ロンドンで第三〇回オリンピック夏季大会が開幕しました。開会式のフィナーレを飾る聖火リレーは、歴代のイギリスを代表するオリンピック金メダリストたちから次世代のアスリートたちへとバトンタッチされ、参加国・地域の代表とともに入場してきた「銅の花びら」へ点火、二百四の炎は一つの聖火となり大輪の花を咲かせました。政治・宗教・差別などから離れ、最高のパフォーマンスが演じられるスポーツの祭典であるオリンピックにとって、一つの象徴的な出来事でした。

さて、そうした象徴的出来事が象徴として意味を持つのは、オリンピックが、最もグローバル化したものであり、文字通り世界中に同時生中継されるメガ・イベントだからでしょう。

サウジアラビアの女性アスリートの行進を見て、宗教的理由から女性のスポーツ活動が制約されていることを私たちは改めて知るのであり、「平等」や「宗教」について考えるきっかけとなります。同様に入場国・地域の幾つかが、イギリスからの独立国であり、フランス領土であることを知ると植民地主義の「歴史」を思い返します。アメリカ選手団の制服が中国製なので「全部燃やしてしまえ」というアメリカの議員の声が届く

と、「グローバル」や「ナシヨナリズム」とは何か？と疑問を感じます。そして大会初日に「ドーピング」検査陽性で離脱した選手がいるというニュースに驚きを隠せません。

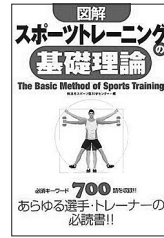
なぜスポーツの祭典であるオリンピックにこうした諸問題が露出してくるのでしょうか。この問いに答えるためのヒントが本書にはちりばめられています。本書は札幌大学文化学部主催の北方文化フォーラムで著者たちを招いて開催したシンポジウムに端を発して、四回にわたる討論をまとめたものです。スポーツ史、文化人類学、思想・哲学を専門とする著者たちの熱い議論に、オリンピック大会を視野に入れて耳を澄ませてみるといういでしよう。私たちの興味関心や問題意識、知識に応じていつでも刺激を与えてくれる一冊です。

その他の参考文献

- ・稲垣正浩他『図説 スポーツの歴史』大修館書店
- ・今福龍太『ブラジルのホモ・ルーデンス』東京外国語大学出版会
- ・西谷修『世界史の臨界』岩波書店
- ・日本体育協会監修『最新スポーツ大事典』大修館書店
- ・日本体育学会監修『最新スポーツ科学事典』平凡社

## 増田 敦

スポーツ教育・野外教育／運動処方・自然体験活動



### \*図解 スポーツトレーニングの基礎理論

横浜市スポーツ医科学センター

西東社 二〇〇七

近年、生活習慣の悪化に伴い、人々の健康が損なわれてきている。平成八年に、従来用いられていた「成人病」の名称が「生活習慣病」に変更したことから、生活習慣の悪化を伺い知ることができる。

一般に、健康を保持増進させるためには、栄養、運動、休養の三項目の内容とそれに伴う生活習慣のあり方を考えていくことが必要である。特に運動（身体活動量）は栄養や休養にも影響を与えるものであり、日々の生活の中に運動を習慣化させていくことが必要である。しかし運動は、「何でもいいからやればいい」というものではない。運動は、目的に応じ、科学的な理解と科学的に裏づけされた方法に基づいて実践することが重要で、このときはじめて効果を期待することができる。

本書は、この「科学的な理解と科学的に裏づけされた方法」を学ぶ上において適している書である。運動を実践する上において基本的な理論を系統的に配置し、割合、基礎知識がなくて十分に理解できるように構成されている。この一冊で健康保

持増進のための運動のみならず、競技力向上のためのトレーニングについても理解することができると思う。健康保持増進のために運動をしたいと考えている学生、スポーツに関心のある学生、将来スポーツ関連の仕事に就きたいと考えている学生にぜひ読んでもらいたい書である。

その他の参考文献

- 池上晴夫『運動処方の実際』大修館書店
- 小林敬和『からだづくりの基礎知識』山海堂
- 大阪体育大学体育学部編『基礎から学ぶ体育・スポーツの科学』大修館書店
- 石井直方 谷本道哉『体脂肪が落ちるトレーニング』高橋書店





## 五感で学べ

川上康介著

オレンジページ 二〇一一年

本書は、全寮制農業学校「タキイ研究農場付属園芸専門学校」で学ぶ生徒と、生徒と共に働き指導する先生の365日を追ったドキュメンタリーである。本書の副題に「ある農業学校の過酷で濃密な365日」と書かれている。読んでみると確かに実習や講義、そして課題の多さ、全寮制ならではの規律とその厳格さなど、「自衛隊なみのハードさ」と農業関係者の間では言われているのも頷ける学習内容である。

ドキュメンタリーである本書で、著者が読者に伝えたかったことは、「はじめに」に記されているように「人間に備わる五感のすべてを働かせながら教え、教わる」ことの重要性であり、そして、現在の日本における「教育のあり方」を問うているのではないかと感じた。

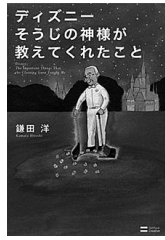
確かに、学校での学習で農業のプロになるための知識や技術は身につく。しかしその学習を通してもっと大切な学びがあることを、彼らの学校生活の記録から伝えている。その学びとは「生きる力」ではある。

近年、「生きる力」は一般化した言葉としてよく聞く。しかし本当にその意味することを、学校教育を通して子どもたちに身につけさせているのかと問われるとはなはだ疑問である。そ

う言った意味において本書は「農業書」ではなく、教育のあり方を問う「教育書」である。これから教育職を目指す学生の皆さんにぜひ読んでもらいたい書籍のひとつである。

その他の参考文献

- ・林竹二『学ぶということ』国土社
- ・鴨下重彦編『現代に求められる教養を問う』to be 出版
- ・沖田行司『日本人をつくった教育』大巧社
- ・森田勇造『生きる力を育てる』くもん出版



## ディズニー そうじの神様が 教えてくれたこと

鎌田洋著

オレンジページ 二〇一一年

ディズニーランドの創設者「ウォルト・ディズニー」を知らない人はいないと思う。それでは、その彼が絶大な信頼を寄せ、ディズニーの世界で「そうじの神様」と呼ばれたチャック・ボヤージンという人物をご存じだろうか。本書は、ディズニーランドで「キャスト」として働いていた鎌田洋氏が「そうじの神様」から直接受けた言葉やエピソード、そして「無言で教えてくれたこと」をもとに創った四つの物語が書かれている。物語風であるのとても読みやすく、一時間もあればすぐに読めてしまう本である。

しかし物語に込められている著者（鎌田洋）の「想い」は読者に大切なことを教えてくれる。少し哲学的な言い方になるが「何のために学ぶのか」、「何のために働くのか」、そして「何のために生きるのか」ということを教えてくれるのである。「はじめに」で著者は次のように記している。「騙されたと思って読んでみてください。私が、一生消えない魔法を授けられたように、一生大切にしたいくなるような、ディズニーのそうじの世界に秘められた『仕事で人を幸せにするヒント』が見つかるかもしれません」。

「たかがそうじ、されどそうじ」という言葉を聞いたことが

ある。確かに「たかが」そうじである。誰でも簡単にできると思っているし、誰もが、できれば避けたい。けれども、そのそうじを通して人として生きていく上で大切な、多くの学びがあることを、本書は四つの物語を通して読者に伝えてくれるのである。

ブックレビューの最後に、「そうじの神様」チャック・ボヤージン氏の言葉を引用して終わりたいと思う。「子どもがポップコーンを落としても、拾って食べられるくらい奇麗にするんだよ」。あなたはこの言葉をどのように考えますか？ その答えを見つけるために本書を読んで見て下さい。

### その他の参考文献

- ・生井俊『ディズニーランド3つの教育コンセプト』こう書房
- ・平田治『子どもが輝く魔法の掃除』三五館
- ・舛田光洋『夢をかなえるそうじ力』総合法令出版
- ・西條隆繁『体でおぼえ心で学ぶ人間づくり』海竜社



### はじめての特別支援教育 教職を目指す大学生のために

柘植雅義・渡部匡隆・二宮信一

納富恵子 編

有斐閣アルマ 二〇一〇

今、障がいのある人を含めて、様々な人々が生き生きと活躍できる「共生社会」を実現していこうという動きがある。

そのような動きの中で、障害のある人たちの教育は、「障害に応じた場に着目した特殊教育」から「子どもの特別な教育的ニーズに対応した特別支援教育」へと転換が図られた。これまでに、特別支援学校や小・中学校の特別支援学級で行われてきた障害のある子どもたちの教育は、対象を広げ、幼稚園から小・中学校、高等学校までのすべての学校で行われるものとなった。特別支援教育は、学校内のすべての教師や関係職員が担うものになったのである。

本書は、いかなる学校の教師を目指す大学生にとっても必須となった特別支援教育のテキストといえる一冊である。内容は、特別支援教育の理念やシステム、子どもの理解と指導・支援、保護者や関係機関との連携の三部構成となっている。対象

となる子どもたちの障害の状態やどのように対応するのかなどがコンパクトにまとめられている。特に、新たに特別支援教育の対象となった発達障害について詳しく取り上げているのが特徴である。本書の執筆は、編集に当たった四氏のほか、障害のある子どもの教育に直接携わってきた方や教員養成の専門家などが担当しており、教育学や心理学、医学の各分野からの情報が提供されている。特別支援教育について、全体的にさっと概観したい場合や特定の事項について再認識するために活用することが可能である。

特別支援教育についての認識は、深まり広がっていると感じるが、その内容を正しく理解することはなかなか難しい。これから教職を目指す学生に、基礎・基本として学んでいただきたい一冊である。

その他の参考文献

・阿部利彦編『教師の力で明日できる特別支援教育』明治図書 二〇〇七

・太田俊己監修『発達障害児らのハッピーを支える』福村出版 二〇一〇



## 生命の輝く教育を目指して 医療的ケアの課題

飯野順子編著

ジアース教育新社 二〇〇六

昭和五十四年（一九七九）の年は、特殊教育（現特別支援教育）にとって、教育上大きな転換期になった年である。この年に養護学校（現特別支援学校）の義務制が施行され、今まで就学免除や猶予を受けていた子どもたちが全て養護学校等に就学できるようになった。それ以降、年々障害の重い子どもが学校に登校するようになり、その数も増加の一途をたどっている。

障害種の中でも特に肢体不自由を中心に障害の重度・重複化が顕著になり、昭和六〇年（一九八五）頃から、痰や唾液の吸引、酸素吸入、気管切開部の管理、経管による栄養物の注入及び導尿など、いわゆる医療的ケアを必要とする子どもたちが在籍するようになり、その人数は年々増加する傾向にある。これは、周産期医療や救急医療の進歩等により、救命率が向上したのが要因としてあげられる。また、ノーマライゼーションやQOLの理念により、在宅医療が推進されていることも側面的な要因にあげられている。

著者の飯野順子氏は、昭和四一年に養護学校教諭として二校

を勤務した後、昭和五九年に東京都教育庁に指導主事として勤務したときに、医療的ケアの課題に出会い、その教育をいかに充実させるかに奔走した。その後平成九年に都立肢体不自由養護学校の教員等有志で「医療と教育研究会」を設立し、医療的ケアの必要な子どもたちとの触れ合いを通し、その生命の輝く教育を目指し実践してきた。

最後に、この冊子に収録されているある小児科医が、小学校で行った「命の授業」の一部を紹介したい。「『きみが生まれてきたとき、初めてきみを抱っこしたときのお父さん、お母さんの気持ちを聞いてきて。』との宿題に対する子どもたちの答えは、「生まれてきてくれてありがとう、柔らかくてかわい、やつと会えたね、小っちゃいな、早く大きくなあれ、とてもうれしい気持ちになって涙が出たよ。」等々。「生まれてきてくれてありがとう」という言葉。親から子どもへ生きる力を与えてくれる、とても大切な言葉である。例え障害をもって生まれてきた子どもであっても、祝福できる社会と医療者でありたい。「人は診断や評価の対象者ではない、人は愛される対象である。』私の心の中に今でも強く残っている言葉である。」

その他の参考文献

- ・朝野富三著『いつか君に』三一書房 一九九八
- ・柴田保之著『みんな言葉を持っていた』オクムラ書店

## 百井悦子

特別支援教育／知的障害教育・発達障害教育



おひさまのついでに  
ADHD など発達障害のある子どもの本家の支援  
家族の想い編

高山恵子編著 えじそんくらぶ著

ぶどう社 二〇〇七

ここ近年、「発達障害」という言葉は、社会的認知が得られてきているものの、その特性や理解となると、まだまだ十分とは言えない。

編者の高山恵子さんは、ご自身が ADHD（注意欠陥多動性障害）という発達障害があり、小さい頃からなんか変だなと、ずっと「生きづらさ」を感じていた。アメリカの大学院に通っていた時にこの障害の存在を知り、自分の強い個性が、実は障害だったということを知り、大きなショックを受ける。しかし、そこは、さすがに ADHD の特性を発揮し、「そうだ！このことを日本に知らせて、多くの子どもを救いたい！」と考えるようになる。日本での法整備である二〇〇三年の発達障害者支援法成立以前の一九九七年のことである。

帰国後すぐに、ADHD のある当事者や家族を支援する NPO 法人「えじそんくらぶ」を設立し、支援にかかわる活動を推進する。

本書は、「えじそんくらぶ」に所属している当事者や家族に

よって書かれた「ADHD ストーリー」である。それだけに、当事者の困り感や理解が得られないことから傷ついた生々しい体験や思いが伝わってくる。「えじそんくらぶ」の理念は、「ADHD という障害は、理解と支援があれば個性になる、そして才能にもなる」である。

理解がないとそこから生まれるのは、偏見と差別と排除である。発達障害は、決して親の育て方が悪いからとか、本人の性格の問題ではない。脳の機能障害である。本人や家族のせいではないことに困難を感じて苦しむのは、社会の在り方の問題である。今日、日本では障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成を目指して、全ての学校で特別支援教育が行われている。

将来、教員を目指している学生には、学校に在籍して困難を感じ、一人で悩んでいるすべての発達障害のある児童生徒に寄り添う支援者としての教師になる上でも、ぜひ、一読してほしいお勧めの一冊である。

その他の参考文献

- ・トマス・G・ウェスト著『天才たちは学校がきらいだった』講談社 一九九四
- ・杉山登志郎著『発達障害の豊かな世界』日本評論社 二〇〇〇
- ・長沼陸雄著『活かそう！発達障害脳』花風社 二〇一